

■マルティナ 電気アンマリベンジ！

——とある町での武闘会。

「はあっ！」

【くっ！ この……】

——あの時……

「ふふ、緊張しすぎよボウヤ。そんなんじゃ……」

【——！ 今だっ！】

——私は、油断していた……

「あっ、しまっ……」

——相手は年下の少年。それも初試合で緊張しており、実力が発揮できていない。

それを見抜いたことで、逆に気が緩み……隙が生まれ、気を取り直した少年に逆転された。

互いの狙いや位置取り……それらが少年に味方し……偶然が重なって生まれた、両足を掴み上げられるという状況。

【そらああっ！】

「ま、待って……」

——初試合で興奮した少年は、無防備な私の股関節に……蹴りを連打。……厳密には、少年は興奮しすぎて上手く蹴ることができず、足裏を密着せて震動させた……

ガガガガガッ！

「あ！ 待っ……あぁっ♥」

——思春期……発情期となり、生理的な周期のタイミングの都合もあり敏感だった私は、股間への刺激に耐えきれず……

「もっ♥ やめっ♥♥」

——達して、しまった……

ガガガガガガッ！

「あ♥♥ つぐ♥♥ んんんあっ♥♥ ……………~~~~~おッッッ♥♥♥」

『なんという事だマルティナ！ 一瞬の隙を突いた初参加の少年につ……なんと電気あんまでKO———！
人には見せてはならないものが股間から流れている———っ！』

——試合で、股間を踏まれ、無様な失禁……正しくは、潮噴き……を晒し、敗北する。
あってはならない痴態は、私の記憶に深く刻まれた。
その場にいられなくなった私はすぐに町を離れたのだが……
今日はとある事情により、また屈辱の思い出の場に来ていた——



(嫌な思い出ね……)

世界の危機を防ぐために魔物を倒す旅をしているマルティナ。
この日 立ち寄ったのは、以前 武闘会で信じがたい恥を見せてしまった町だった。
当然マルティナにとっては避けたい場所だが……魔物に占拠されているとなれば、そんなことを言うてはいられない。
一刻も早く魔物を追い払うため、町で情報収集。
すると、ちょうど今……町を占拠した魔物が催しを開いており、そこに町の人々のほとんどが集められているという。
場所は——奇しくも、あの闘技場だ。

(よりによって、あの場所なんて……ああもうっ！　すぐに終わらせるわよ！)

闘技場はこの小さな町では最大の施設。人々を集めるにはここが最適なのだろう。
しかし、魔物が闘技場を使って一体何をしようというのか。
……あまりいい予感がしないが、その企みも魔物を倒せば露と消える。
町の人々のためにも、魔物を倒すために闘技場へと入り——

「！　キミは……！」

【あれ、マルティナさん？】

そこに居たのは、あの時の少年——かつてマルティナが不運にも屈辱を味わわされた相手——だった。

思い賭けない再開に、つい反射的に記憶がよみがえって薄ら頬が朱くなる。
が、恥じている場合ではない。少年の様子は明らかにおかしく……魔物と同質のチカラを放っているのだ。
闘技場の真ん中に堂々と立っていることからして、少年がこの謎の催しの開催側であるのは見て明らかだった。
一体どういうことなのか、尋ねる前に少年が聞いてくる。

【なんでここに？　まさか、また無様にヤラれに来たの？】

「バカなことを言わないで！　キミこそ、どうしてこんなところに……」

【やだなあ、このチカラを見てわからない？　……ボクは魔物側についたんだよ】

魔物が占拠している町で堂々としている……理由は明白だったが、やはり予想通り、少年は魔物に魂を売ったのだ。

格闘の素質を見込まれたのか、自分から降ったのかはわからないが……

目の前の少年からはチカラを振る舞うことへの歓喜、無邪気な残酷性しか見えない。

「魔物と取引して、チカラを得ていると言うの……?!」

【そうだよ？ いまどき珍しい話じゃないでしょ？ 魔物に逆らっても得はないんだし。

で、今から魔物用のイベントで、テキトーな闘士やお姉さんをボコって見せしめにしようとしてたんだけど…
…ちょうどいいや。

マルティナさん、またここで無様な姿を晒してよ♪】

「なっ……」

少年が手を翳すと、大勢いる魔物たちが術を唱える。

一体一体は強くないが、集まって詠唱することで魔力の結界が作られていく。

どうやら闘技場で一对一の試合を強制する結界のようだ。

(結界に入れば、数での不利はなくなるわ。……でも……)

結界のおかげでお互い邪魔が入らず、対等な条件で戦える。

しかし結界の外に出るのは難しくなり、場外で何かあっても対処し難くなる。

魔物の誘いに易々と乗るわけにもいかず、躊躇うマルティナの背を少年の言葉が後押しする。

【町の人たちを守りたかったら……わかるよね?】

現在、町の人々は闘技場の観客席に集められている。

各所には魔物が配置されており、言わば町民全員が人質に取られているようなものだ。

少年が合図をすれば、いつ町民に手が出るか分からない。引くに引けない状況となり、マルティナは拳を握りながら舞台へと歩を進めた。

「っ……！ いいわ！ ちょうどいい機会よ、あの時のリベンジをさせてもらうわ!」

闘技場というシチュエーションであるため、つい闘士としてリベンジという言葉を使ったマルティナだが……

無論、少年を倒すことはそのまま少年を守ることにになる。

少年にいくら素質があろうと、魔物のチカラはそう長く順応するとは思えない。

町の人々、何よりも彼を守るために 舞台に上がるが――

「っ?! こ、これは……!」

【気付いた？ ただタイマンするだけの結界なわけないよねー♪】

結界に入った瞬間に全身が、鉛のように重くなったような、それでいて綿のように柔らかくなったような感覚に包まれる。

やはり結界はただ一对一を強いるのではなく、魔物らしい卑劣な罠――戦闘力を下げる呪いも付随していたのだ。

【マルティナさんの実力を考えると、いいハンデでしょ？】

「ええ……この程度、なんでもないわ！ 覚悟しなさいっ！」

しかしもう後には引けない。試合開始のゴングが響き、マルティナはすかさず間合いを詰めて蹴りを繰り出す。

（これぐらいなら、魔物のチカラを得た人にだって……！）

確かに呪いによって機動力は落ちた。だがそれでも、眼で測った少年の強さは凌駕している自信があった。

実際、呪いがかかっているながらもその豪脚の速度と威力は充分なものだ。

素早い蹴りを連発し、少年を追い込んでいく……はずだったが。

【ははっ、どうしたのマルティナさん？ やっぱりただの人間じゃあその結界の中ではうまく動けないみたいだね〜♪】

「くっ……まだよっ！」

（攻撃が、当たらない……！）

マルティナの蹴りは一つとして少年を捉えられないでいた。

感覚としては、少年の速度に追いつけないはずはないのだが……呪いで能力が下がった今の身体を、流石のマルティナもすぐには使いこなせない。

その感覚と肉体の微妙なズレのせいで呪い以上に戦闘力が落ちており、少年にはギリギリのところで躲かされてしまうのだ。

【さて……そろそろ反撃するよ？】

「やれるものなら……っ！」

回し蹴り、跳び蹴り、宙返り蹴り……様々な蹴りを連続で放ち反撃の機会を与えずにいたのだが、少年が動きを見切ったか攻勢に出た。

マルティナが着地した隙に踏み込んだ彼が繰り出したのは、手刀。

素早い手が頭を狙ったかと思い顔面を守るが、手刀は軌道を変え……

最初から狙い澄ましていたかのように、服の上からの的確にマルティナの乳首を突いた。

「あっ？！ こ、このっ……！」

【ははっ！ マルティナさん、可愛い声が出てない？ もしかして今ので気持ち良くなっちゃった？】

（やっぱり……！ あの時のように……いえ、あの時以上に、私を試合で辱めるつもりね……！）

乳房への攻撃に対するマルティナの反応を愉しそうに見る少年。

やはり最初から、このような行為が目的だったのだろう。

あの時は偶然……半ば事故としての恥辱攻撃だったため、彼にも罪悪感はあるだろうが、

チカラを手にし、心まで魔物と化した今、ここまで下衆な行為をも愉しむようになったというわけだ。

「なに勝ち誇ってる顔してるの……勝負はこれからよ！」

彼の眼を覚まさせるためにも、負けるわけにはいかない。
蹴りで反撃するが、今度はすぐに見切られて足を掴まれる。
そして同時に蹴り——金的蹴りを打たれ、マルティナは股間に重い衝撃を喰らってしまう。

ガンッ！

「あぐうっ♥」

【マン的ヒット〜♪ あれ、今度はホントに色っぽい声になってるよお？】

女の身であるがゆえに警戒が薄れていた股間部。
もちろん男と違い睾丸はないものの、急所であることに変わりはないため大ダメージは避けられない。
予想外の部位に攻撃され、激痛に襲われるかと思ったマルティナだが……
股間から全身に奔り抜けた感覚は、痛みというよりは快感であった。

(なっ……今のはっ？！ ただの痛みじゃない……！ まさか……快感、だとでもいうの……？)

結界の効果は、一対一の強制と戦力ダウンだけではなかった。
……対戦者の性的興奮。そんな下衆極まる効果も含まれていたのだ。
むしろその効果が特に強くされているのだろう。
股間を蹴られ、闘士としての苦痛ではなく牝としての啼き声が漏れるなど、通常では有り得ないことだ。

【やっぱりマルティナさん、股間が弱いのかな？ 性的な意味で♪ さあ、もう一発いくよっ！】

「くっ……させないっ！」

相手が動く前に蹴りを放つ。だがやはり、まるで当たらない。

【ははっ、また股間を攻撃してくださいって言ってるようなもんだよ？！ それっ！】

(来たっ！)

再び股間への蹴りを狙った少年。しかしマルティナもそれを読んでいる。
ガードし、少年の蹴り脚を捕った……はずだったが。

【遅いっ！】

「あっ……！」

少年はマルティナの思考も読んでおり、股間蹴りを中断。
マルティナが蹴りを捕ろうとする動きの隙に、有り得ない高速で後ろに回り込んだ。
そして胸部に腕を回し——胸を驚掴みしながら抱き締める。変形のベアハグだ。

「あぁっ♥ あぁぁぁっ♥」

少年の手が胸を握り、腕がギリギリと背骨を締め上げる。
力任せに胸を掴まれ、しかも胴を折らんばかりに搦じ上げられ……痛いはずなのに、痛みはほぼ皆無。

代わりに胸は揉み潰されていることに快感を、背部も痛覚が変換されているのか、愛撫されているような高揚感を発している。

痛みがそのまま快楽に変わったような、おぞましくも心地よい被虐感を煽る感覚。

今まで感じたことのない感覚に、マルティナは快楽による苦痛で呻き声を上げていた。

【どうしたの？ おっぱいベアハッグで感じちゃってる？

股間だけじゃなくおっぱいも弱いんだね♪ ほら、町のみんなにも見せてあげなよ！】

「や、やめなさいっ！ ああっ♥ つ……見ないで……っ！」

そしてあろうこか、胸を掴んで拘束したまま人々に悶える様を見せ付けられていく。

するとマルティナの懇願に反して人々は歓声を上げていく。

町の人たちは人質にされていながら、今までの恐怖政治などで精神が狂っているのか、自分たちを助けに來た戦士の危機にも酷く闘争心と加虐心を煽られているのだ。

【ほら、みんなマルティナさんがイジメられて悦んでるよ？ もっといい声で啼いてよ】

「くうっ♥ 調子に……乗らないでっ！」

【はいはい、っと】

（っ？ 自分から手を離し……）

【じゃあ次はこのお尻にっ！】

ビシッ！

「はううっ♥」

少年は自ら拘束を解くと、快感でふらつくマルティナの臀部に蹴りを叩き込んだ。

これにもやはりマルティナは快感を得てしまい、つい喘いでしまうが……快感よりも、少年の態度の方に屈辱を感じさせられる。

（このコ、いつでも勝てるのに……！ 私を弄んで、愉しんでいるというの……？）

少年はマルティナを徹底して勝つつもりなのだ。

勝ちを確信しているからこそできる行いに、闘士としてのプライドが傷付けられる。

「ふざけたマネを……余裕のつもりっ？！」

相手が余裕を見せているからこそ、いつか反撃のチャンスがあるはず。そう思い仕掛けるが——致命的に遅い。

飛蹴りを、少年は半身になって回避。

更にすれ違いざま、的確に乳首を抓り上げ……マルティナは空中で煩悶させられ、華麗な足技が一転して体勢を崩し、胸を抑えて悶絶してしまう。

「く♥ ううう……っ♥」

（やはり……は、速過ぎる……♥ こんな、追い付けるわけ……♥）

諦めてしまいそうになる女闘士に、少年が追い打ちをかける。

【ほらほら、最初の威勢はどこ行ったの〜？】

ぐりっ♥

「ああああっ♥」

胸を踏み付けられ、痛みがない代わりに潰される痛みと同等の快感が胸の内で爆ぜる。
大勢の前で股間を蹴られ、尻を蹴られ、胸を踏まれ、それでいて身体は悦んでしまう。
屈辱的な状況の中、それでもマルティナの眼は死んでいない。

【ほらほらあ、おっぱいで感じまくってないで、少しは反撃しなよ〜♪】

「くっ♥ ん♥ んはああっ♥」

(油断した……隙に……！)

少年が何度も胸を踏み……その内、余裕からか足がそれまでよりも高く上がる。
攻撃と攻撃の間が開くその瞬間を、マルティナは見逃さなかった。

「はああっ！」

【なにっ？】

余力を出し切り、マルティナの下半身が跳躍。
地を蹴った豪脚が一気に跳び上がり、余裕を見せていた少年に対しサマーソルトを繰り出した。
余裕から焦りに変化した少年の顔に目掛けて飛来し――

【……なーんてね♪】

「っっ?! そ、そんな……っ！」

――起死回生の一撃を、あっさりと躲される。
渾身の蹴りを簡単に掴まれ、更にもう片方の足も掴み上げられる。
そして、あの体勢――以前 少年に敗北した時の、あの体勢を再現してしまった。

【へへ……やっぱラストはこれだよね〜♪】

「ウソ、でしょ……? い……いや……っ」

全力を出し切るつもりでの蹴りが避けられた。
とはいえ、まだ何か反撃の術はあったかもしれない。少なくとも、マルティナは望みを失ってはならないはずだった。

だが、両足を掴まれ股間を無防備にさせる体勢となり、あの時の記憶が……羞恥、屈辱……快楽が鮮明に蘇り、闘争心を失ってしまった。
精神までも無防備となったところで、少年があの時と同じく、マルティナの股間に足裏を乗せ――踏み付ける勢いで、激しく震動した。

ガガガガガッ♥

「あああああああああああああああつ♥♥♥」

ブシュッ♥♥ プシヤアアアッ♥♥

……既にマルティナの身体は火照り切っていた。

トラウマであり強い性的興奮の対象となっていたこの責めを受けたことで、たちまち媚熱が爆発的に増し——不本意にも絶頂に達した。

激しい刺激で牝肉が反応し、勢いよく潮噴きをしてしまう。

が、踏まれることで牝潮は出口を失っており、そのせいで余計にブシャブシャと荒い音を立ててしまう。

(ああ……♥♥ わ、私……また……)

「あひいっ?!♥♥」

潮噴きにより失禁じみた体液を漏らし、再びあられもない痴態を見せてしまったマルティナ。

既にこれ以上ない屈辱だが……踏み責めも快感も、止まることはなかった。

【ハハッ！ イッたイッた！ どうマルティナさん？ あの時と同じように、また試合中に電気アンマで潮噴きさせられる気分はっ?!】

「あはああつ♥♥♥ あつ♥♥♥ ああつ♥♥♥ あああああああつ♥♥♥」

絶頂し、潮噴きし、完全に勝負はついた。……だが、それでも少年は満足しない。

もはや呪いがなくとも脱力したマルティナの足を掴み、股間を踏み付け続ける。

流石にもうこれ以上の恥辱は耐えられない。

何とか逃れるためにもがこうと、脚を払うため手を伸ばそうとしたが……どちらも中断する。

快感と震動で身体が仰け反って強張り、とても反抗できる状態ではなくなったのだ。

体験版はここまでです。続きは製品版で！